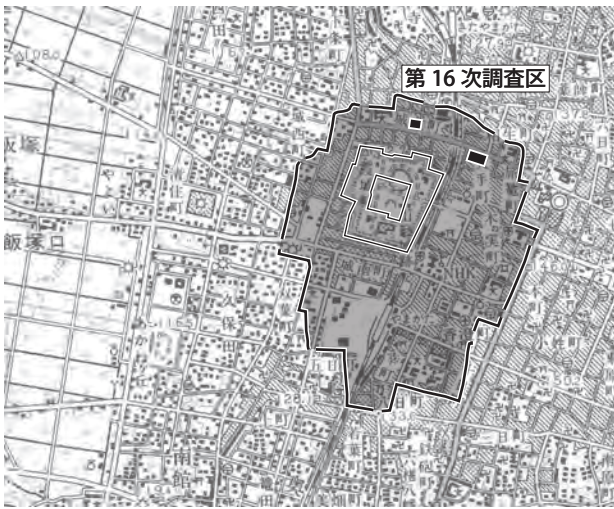


やまがたじょうさんのまる
山形城三の丸跡（第16次）

遺跡番号	201-003
調査次数	第16次
所在地	山形県山形市城北町・大手町
北緯・東経	38度15分28秒・140度20分6秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起回事業	一般国道112号霞城改良事業
調査面積	1,400㎡
受託期間	平成27年4月9日～平成28年3月31日
現地調査	平成27年6月5日～12月4日
調査担当者	小林圭一（現場責任者）・菊池玄輝・高木茜・木村恵理
調査協力	山形市上下水道部・山形市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別	集落跡・城館跡
時代	奈良時代・平安時代・中世・近世
遺構	溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・金属器・瓦・銭貨（文化財認定箱数：71箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

かじょう

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城（本丸・二の丸）を取り囲む東西約1.6km、南北約2kmの広大な城館跡で、文禄・慶長年間（1592～1615年）に最上氏第11代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したとされている。国内では5番目の広さで、奥羽地方では最大の城であった。しかし最上氏は元和8年（1622年）に第13代義俊が改易され、それ以降居居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返し、石高も57万石から5万石まで削減された。その結果、広大な

山形城を維持することが困難となり、手入れが行き届かず、幕末期の水野氏5万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたとされている。

今回の発掘調査は、国道112号の拡幅工事に起因し、平成23年度の第9次調査、24年度の第11次調査、25年度の第13次調査、26年度の第14次調査に続いて実施されたものである。国道112号に沿った区域を、市街地の区画毎に2箇所の調査区（M・P区）に分けて調査を実施した。

遺構と遺物

今回の調査では、奈良・平安時代から近世・近代まで、各時代の遺構や遺物が検出され、人々がこの地に長い期間にわたって暮らしてきた様子が判明した。

遺構が最も多く検出されたのは、P区とした大手町交差点近くの調査区で、近世の井戸跡と思われる石組み施設や水路、道路跡などが検出された。またさらにその下からは、奈良時代の竪穴住居跡も見つかった。一辺が8m程の方形の大型住居跡で、煮炊き用のカマドも検出された。また城北町のM区では石を組んだ井戸跡や焼けた獣骨を入れた土坑などが検出された。

遺物としては、近世の陶磁器類や瓦類が多く出土した

が、中には最上氏時代(16世紀末～17世紀初頭)の瀬戸・美濃や唐津で焼かれた陶器類も含まれており、江戸時代中頃～幕末にかけての陶磁器や瓦類が多く出土した。またM・P区では、8世紀前半に位置づけられる土師器等も多く出土した。

まとめ

江戸時代には武家屋敷となっていた三の丸一带は、古代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤にして城下町が形成され、近代の山形市

街地の発展につながったと考えられる。今回調査した三の丸の北側では、最上氏時代の16世紀末～17世紀の遺物が比較的多く出土したことから、この地域が比較的古い時期に田畑となったため、後世の開発があまり進まなかったと考えられる。また土砂が厚く滞積したため、遺構や遺物が良好な状態で残存したと推定される。三の丸の範囲内でも、場所によって後世の土地利用に差異があったことを示すものであろう。



写真1 P-1区全景



写真2 P-1区道路状遺構調査状況



写真3 P-1区竪穴住居跡(古代)調査状況



写真4 P-1区竪穴住居跡カマド調査状況



写真5 M-3区土坑瓦出土状況



写真6 M-1区石組み井戸跡調査状況



図1 調査区概要図 (S=1:2500)



図2 P-1区遺構配置図 (S=1:100)